

研究だより

R4. 12. 2 (金)

担当：武田則子

小池真理

高等部作業学習授業研究会のまとめ

1 研究授業について

○単元名：わくわくバザーに向けて製品を作ろう

○期 間：8月23日～12月6日

○時 間：10：50～12：05

○場 所：高等部棟 木作業室

○生 徒：1年4名、2年2名、3年5名（対象生徒 3年A、S）

～活動を通して、こんな力を身に付けていく授業。将来のこんな姿につなげていきたい～

- ・教師とのやりとりの中で目標を考えたり、簡単に振り返りをしたりする時間を設定することで、その日の作業に見通しをもって取り組めるようになることをねらった。
- ・作業学習を通して仲間と協働したり、自分の役割に責任感をもったりする中で働く意欲を高め、将来の職業生活や社会自立に向けた力を養うことを期待する。

2 対象生徒の本時の（研究授業）目標

A.Sさん	①力をかけられる方法が分かり、確認しながらやすりがけをする。 ②相手に伝わる声で報告や相談をする。
--------------	--

3 「深い学び」につながる「(主体的・対話的な学びが) できる状況づくり」を学び合えたか？ (どのように工夫や改善ができたか)

〈(主体的・対話的な学びが) できる状況づくり〉の工夫が生きたこと〉

(※自評及びグループ協議より)

○対象児童のねらいを踏まえて、目標と振り返りを毎日簡単にできる方法としてICTを活用（タブレット端末のアプリで選択式のもの）し、作業担当のコメントを含めて担任からも見てもらうことで評価を共有できた。

○タブレット端末の使用が対象生徒の意欲につながっていた。

○タブレット端末が常に横にあり目標確認ができて有効だった。

○指導者の穏やかな口調の言葉かけにより、ナイーブなA.Sさんがうまくいかないことの報告ができるようになった。

〈課題となったこと・改善できたこと〉

●木材の下の部分が磨きにくいようだったので、補助具があるとよい。また「ツルツル」「ザラザラ」の状態がわかるように見本を提示するとよい。

●できたこともできなかったことも伝えられると成長につながる。

●自分で目標を考え言葉で伝えることも大事にして展開できるとよい。

●「ツルツル」にする必然性や言葉で伝える必然性を伝えたり、自分で考えたりすることを大事にできるとよい。

4 この単元で、授業や児童生徒の様子が、どのように変わったのか？
 (PDCA サイクルがうまく機能したか？)

生徒	Before	After
A・Sさん	●報告はできるが、困ったときに教師に相談する声が小さかったり、ごまかしたりすることがあった。	○何かあったら、まず「輪先生」と呼ぶことから始めることで、伝えたい事柄の言い回しに悩んでいるときは教師が補助しながらも、自分で具体的に伝えることができるようになってきた。

5 ご助言（岩手大学大学院教育学研究科 准教授 佐々木全先生）
 〈研究授業について〉

- 「授業の構造」において、学校教育目標は日々の授業に具現化していくものであるはず。単元目標があって本時の目標がある。場合によっては更に具現化されていく。個人の目標と逆算して本時の目標を見ると、もう少し整理すべきかと思う。個別の「望む姿」にあることが、本時の目標として設定されるとよいかと思う。
- 「手立て」について支援の三観点を使うことがある。三つの分類は、「コト」（活動内容、展開）、「モノ」（補助具、作業場）、「ヒト」（教師）である。目標（単元・本時）に対応して、「コト」「モノ」「ヒト」は何であるかというふうに使える。今回の授業の場合、「コト」はやすりがけ、「モノ」は補助具、道具、作業場、「ヒト」は生徒、先生である。教師が隣で一緒に作業しながらチェックし、A・Sさんの評価や補助具の微調整がなされている。手立てがどこからきているかという点、A・Sさんの様子をよく分かっているから講じられる。やすりがけの分析ができてから支援できている。実態把握と課題分析が必要である。やすりがけを知らない人がそこにいると支援ができない。支援は声かけが多くなってしまいがちだが、「ツルツル」という声かけで判別できるか。なかなかよくならなかつたら、20回やると必ずできる工夫をすると声かけが減る。
- 「評価」について、いつ何のためにするのかというと生徒の学びの過程を知るためである。
 - 診断的評価…見取り、見立て。この子のどういう姿を見せるのか。
 - 形成的評価…活動しながら途中で形成的評価をする。学びの過程の把握のため。
 - 総括的評価…授業の最後に行い、学びを次へつなげる。
 - …単元の評価を次の単元に生かす。単元の最後に総括的評価をする。（一つの単位として実施される）
 - …「主体的・対話的で深い学び」を観点として使い、最終的に評価する。
 - …育まれた資質能力の明示のために観点別評価（知・思・主）をする。
 これらの評価がその次の単元の診断的評価に生かされる。
- 校内研究の目的で見るとどうか。一つは、「個別の指導計画を基にした、効果的な授業実践を積み重ねる」、もう一つは、「児童生徒の『深い学び』につながる『(主体的・対話的な学びが)できる状況づくり』を学び合う」とある。これを実現するために、この提案授業を共同研究者（同僚）はどう見るのか、提案者（授業者）はどう見せるのかを共有する。
- 見せ方、見方を多少整理してみる。「深い学び」をどう実現するか。校内研究の中で共有されている定義「般化」「学習の転移」と捉えているとのこと。「主体的で対話的な学び」をもって実現していくとあった。「報告・連絡・相談」を例に説明したい。対象生徒以外の生徒だが、釘打ちを失敗した生徒がいた。教師に「うまくできませんでした。」と報告し、修正をお願いする姿があった。「主体的な学び」になるように教師が様々工夫している。生徒は本気で上手くやりたいと思っている。生徒が思っているから「主体的な学び」が実現されている。「対話的な学び」は、本音で指導者や友人と関わりたい、関わる必要性を理解しているからこそ「対話的な学び」になる。今日の授業の中でできていると察することができた。実現できているからこそ、「深い学び」が積み上がっている。
- A・Sさんのやすりがけについて、下の部分の磨き方が弱く短い物はやりやすいとあったが補助具の工夫について授業者になったつもりで考えてみた。補助具がぴったりだと外れなくなる。また、直角でない材料だとうまくいかない、柔らかい材料だと補助具で傷つく。バネを仕込んで固定することで研磨するやり方がある。また、端までかけるためにはやすりを

大きく動かして端まで磨けばよい。端へゴツンとぶつかるときに、「1, 2, 3…」とカウントする(カウンターを付ける)のもおもしろい。今日は、動作と数える音声がずれるようだった。往復で1と言ったり、引くときに「1」と言ったりしてしまうものだが、カウンターが付いていると正確に数えられるので客観的な指標があってもよい。

- 横方向にやすりをかける動きの方がよいというアイデアがあったが、腕の可動域がどれくらい発揮されているか、肩の動き、立ち方が気になった。今日見たところ、足をそろえた状態だった。これだと、体重移動が小さくなってしまう。左手を机に置いて体を支え可動域を出そうと努力しているが少し足りないようだ。もうちょっと工夫がほしいところだ。作業台の高さは低いと力がかかりやすく、高いとかかりにくい。A・Sさんにはちょうどいい高さだった。もしかしたら、斜めの方向にやすりをかける方が腕の可動域が発揮されることもある。足の位置では右足を出した方がよいなど、フィジカルな面から生徒の動きを見ていくとよい。
- A・Sさんの様子と指導案の実態が一致していないところがあった。不一致が悪いというわけではなく、授業での様子がしっかり文章で表現できるとよい。授業を振り返りながら言語化し聞き取る人が文章化する方法がある。目標から考えると思考が停止してしまうので、今日やったことから考えるとよい。職員室での無駄話が多いと昔怒られたことがあるが、「個別の検討をしています。」と今なら言える。

◎「後方視的対話」というツールを紹介していただいた。(別紙資料参照)

〈授業者・研究からの質問に対して〉

【質問①目標の意識付けについて】

- 一定期間、一定の目標を設定し、必要性をもって積み重ねていくとよい。

【質問②ICT機器の活用について】

- 何をするかではなく、何のためのICTかが大事。今は教師が主導だが、徐々に生徒が自身の姿を見られるように撮影するなどテクノロジーを使えると良い。作業動作についても、短い間でも見るとよい。

【質問③やすりがけしやすい補助具について】

- 木くずがついているからツルツルはする。よって判断の精度は難しい。「ツルツル測定器」が作れないかと思う。傾斜をまっすぐ下りればOK(ツルツル)で止まればまだ、というような道具があるとよい。また、ツルツルになったかどうか判断する人を決めておくのもよい。製品をチェックしていくチームプレイも1つの方法である。

【質問④面取りについて】

- 手作業でちょっと角を取ることは難しい。紙やすりをたるませて固定し木材を滑らせると角だけが当たり削られる。たるませて固定するのが技術的に難しいが、道具を開発するのも楽しい。

【質問⑤『深い学び』をどう説明するか】

- 「主体的で対話的な学び」をどう説明するか。校内研究への期待であり、価値のある取り組みをしているので、これを見出して提案することからやる。ぜひ成果を世の中に発信してほしい。

※ なお、補助具の開発事例をアーカイブするサイトを紹介します。活用を、そして、ぜひ何かあったら事例をお寄せください。

6 研究授業を経ての成果と課題(○成果、●課題)

- タブレット端末及びねらいに合ったアプリケーションの利用により、目標と振り返りを毎日行ったり、担任と評価を共有しやすくなったりした。
- これまでは、困ったときには教師に相談する声小さかったり、ごまかしたりしていたA・Sさんがうまくいかないことの報告ができるようになった。
- 木材にやすりをかけて「ツルツル」にする必然性、報告の際に言葉で伝える必然性を伝えたり、自分で必然性を考えたりすることを大事にできるとよい。

- 木材の下の部分が磨きにくいようだったので、補助具があるとよい。また「ツルツル」「ザラザラ」の状態がわかるように見本を提示するとよい。

7 高等部で特にがんばることの取組みについて

【①個別の指導計画を基にした授業づくり】

- ・作業学習の見学を通して生徒の様子を知ること、担任と作業担当者との話し合いに生かした。作業中の課題についても情報交換したり、手立てを考えたりすることができた。
- ・作業班ごとの話し合いが必要で、課題に対する手立てを考える機会も必要である。

【②日々の授業改善】

- ・学部や学年全体で集まらなくとも、関係者でその都度生徒の様子を見つつ、改善策を考えて次に生かすことができた。
- ・記録については各担任が可能な限りメモ程度のものを取っている。

【③「深い学び」につながる「(主体的・対話的な学び)ができる」授業づくり】

- ・授業の終わりに感想発表を行った。それぞれ、その日の活動について自分の思いを伝えることができた。視点を他者に向けて感想が言えるようになるとよいと考えている。

8 その他 授業研究会で話題になったこと、どうしても伝えたいこと

- ・タブレット端末で自分の姿を撮影し、自身の磨けていないところを見て自己評価できるとよい。
- ・作業学習は担任以外の人と関わる貴重な時間であり、社会に出る大事な一歩である。作業担当との関わりそのものが成長につながっている。

